

被災者の「健康課題の見える化」と中医学 ～実際の症例を通して、皆で弁証推論しよう～

石川家明

友と共に学ぶ東西両医学研修の会 (TOMOTOMO)

木村朗子

ともともクリニック

災害医療は、医療者が生活の場に行って治療しますが、日々の診療は患者さんが医療の場にやっ
て来ます。そのため、患者の母集団が異なり、出合う疾患が異なり、心構えが違ってきます。でも、
「弁証論治」という昔からある「臨床推論」があるので、どこで診療しても、病態生理学を使えて
論理的に処方導けます。

まず、「避難所」ではどのような患者さんたちが鍼灸と漢方が必要なのかのあらましを俯瞰しな
がら、東西両医療の臨床技法を使いながら患者さんの症例を一例ずつ紐解いていきましょう。入門
編ですので、初学者や学生さんたちと一緒に考えていきたいと思えます。

日本では 20 年ほど前から医学部授業に「臨床推論」が教えられるようになりました。私たちは
中医弁証法こそが世界に先駆けて行われてきた最初の臨床推論技法であるとの視点から、2015 年
から本学会の教育セッションなどで臨床推論を紹介してきました。弁証論治と臨床推論を合体させ
て「弁証推論」と造語しました。

今回は、臨床推論の技法と弁証論治の技法がどこで結合して、どのように症例に応用するのかを、
一つずつの実際の症例に当てはめて検討していきます。具体的には、Semantic Qualifiers、OPQRST、
Pivot and Cluster Strategy、Illness Script、Framework など最新の医療教育で学ぶ馴染みの診断技
法がそのまま中医学にも適応できることを経験して下さい。

(なお、ご自分の治療法をひたすら披露する方の入場は、セッションの趣意に反しますので参加を
お断りいたします。)